カトリック仙台教区報

2019年4月7日　No.237
発　行
カトリック仙台司教区
〒980-0014
仙台市青葉区本町 1-2-12
Tel(022)222-7371 Fax(022)222-7378
発行責任　広報委員会
URL http://sendai.catholic.jp/

司祭、信徒、修道者の接着剤としてみんなで一緒に進んでいきたい

平賀 徹夫司教に聞く

１月のある日、平賀徹夫司教様をお訪ねし、今年の抱負を語っていただきました。

「2019 年　年頭書簡」を「新しい恵みの年 2019 年を迎えて」というタイトルで皆さまに出しました。一言で申し上げますと、そこに書いた全てのことが、今年の抱負と言っていいでしょう。

その中で、今、特に強調したいことは、「地区制度」についてです。

１万人を切った信者数

昨年暮れに出された、『カトリック教会情報ハンドブック　2019』に発表されていますが、仙台教区の信者総数が１万人を切りました。小教区は 52、信者総数は 9949 人です。ショックでしたね。

仙台教区の現状、将来のことを考え、５年前に「地区制度」を導入いたしました。仙台教区は、司祭、信徒、修道者の協力関係を深くし、お互いが心と力を合わせて協力し合うことによって、「地区制度」を（実りあるものにしたい）、と思いました。

大震災が起こったちょうどその年、仙台教区設立 75 周年を記念する教区大会を計画して、2011 年７月３日に向け、教区のすべての小教区、学校、修道院、施設のつながりを意識した「ろうそくリレー」が行われ、祈りがささげられました。その時の熱い思い、つながりの意識を今も皆さまが持ち続けてくださっていると確信しています。しかしその一方で、ミサの参加者が少なくなっていると聞いています。

続く厳しい状況

どうすれば、信徒の交わりを生き生きとしたものとできるでしょうか。私たちは皆、１つの体であるということを意識するために、どうすればいいのでしょうか。信徒同士が互いに無関心になってきたのかなとも感じます。司祭が常駐していなければ、昼間、信徒が訪ねて来ても、司祭はいません。それをどう乗り越えていけばいいでしょうか。また、同じ地区内でも小教区は遠く、信徒同士の家も離れています。教会のつながりを、どのように保っていけばいいのでしょうか。

接着剤として役割をはたす

このような難しい状況ですが、司教になったとき、皆さまにお話ししたことを思い出しています。それは、司教の役割は、教会の中で接着剤のようなものかなということでした。人と人、司祭と信徒、司祭と修道者、信徒と修道者の接着剤として働きたいと思ったのでした。どれだけ、その面でお役に立っているかわかりませんが。

今年１月、私は 74 歳になりました。司教の引退は 75 歳です。ですから、今年の１年をかけて、すべての小教区を回り、信徒の方々とお目にかかりたいと思っています。その節はどうぞよろしくお願いいたします。

仙台教区のうごき

【司祭評議会報告】

○　司祭評議会役員会が９月11日（火）、10月15日（月）、12月11日（火）、１月８日（火）、同定例会が11月６日（火）に教区本部において開催された。これらの会議は８月末日に開催された仙台教区司祭の集いの事後対応、および12月に開催された司祭の集いに向けた準備の会議であった。

○　８月の司祭の集いでの検討結果を踏まえて12月末日には『葬儀の手引きー小教区における葬儀についてー』（カトリック仙台司教区版）が各小教区宛に発送された。

○　12月司祭の集いについて

12月３日（月）から４日（火）にかけて、秋保温泉岩沼屋において開催された。参加者は平賀司教以下司祭26名。昨年９月宣教司牧評議会から提案された「拡大版宣教司牧評議会の開催」を契機として、司祭評議会では「宣教とは」という基本的な問いから出発しつつ、現在司祭団の置かれている現状と課題を共通に受けとめようとする歩みを始めた。この話し合いの結果が12月11日開催の役員会において資料として提示された。以下にそのポイントを挙げておきたい。

１．外国人と共に歩む教会（外国籍信徒との関わりをもっと大切にする。）
２．カトリック事業所との関わり（幼稚園、保育園、養護施設等との関わりの在り方）
３．「地区制度」の振り返り（ミサ優先と司牧の課題について）
４．小教区共同体の共同体づくり（司祭と信徒の密な連携の在り方）
５．青少年の育成（司祭・修道者召命を超えた召命活動の活性化は）

今後、これらの課題にどのように対応してゆくか論議されることになる。　　會津 隆司　神父

【宣教司牧評議会報告】

2018年９月の宣教司牧評議会定例会でその開催が決定した、「拡大版宣教司牧評議会」（仮称）のその後について11月と2019年１月に宣教司牧評議会役員会を開き、①中身について、②準備の仕方について、を話し合っております。

①中身について、テーマは「宣教」とすること。「宣教」と言ってもキリスト教とは何か？という内容ではなく、わたしたちが日々の生活の中で感じる心からの喜び（福音）を出会う人に伝えているか？または出会う人から伝えて貰っているか？の確認を仙台教区に生きるわたしたち一人ひとりのキリスト者が再確認すること。

②準備の仕方については、上述した再確認を小教区とそして各地区とにアンケート及びレポートをお願いし、準備委員会とやりとりをすることがそれぞれの準備となるだろう。さらに、司祭評議会にも投げ掛け、仙台教区で働く司祭団としてもこれからの宣教に対する方向性を見いだすことにつながればと考えております。今後はその準備委員会をどのような形で起ち上げるのか？（宣教司牧評議会役員会の役員も改選の時期と重なっており、新たな人材を準備委員会に取り込むか等）開催の時期をいつに設定するのか？等が次の役員会の話題になると思われる。

小松 史郎　神父

【広報委員会報告】

2019年２月８日（金）仙台教区広報委員会が教区本部において開催された。

出席者は平賀司教以下広報委員６名。今回からCTIC（Catholic Tokyo International Center）から仙台教区に派遣されているクレアさんも出席。

○　仙台教区報の英語版の発行について

司祭団からの要望により、教区報の英語版を出すことの是非について審議した。

審議の結果、巻頭言と外国籍信徒の近況に関わるニュースおよび外国語ミサ予定を掲載したニュース（Catholic Sendai Diocese News）を発行することとした。

○　広報委員会総会の開催について

2019年３月21日（水、春分の日）午前11時から午後３時まで

カトリック仙台司教区センター（元寺小路教会）において　　會津 隆司　神父

【教区本部事務局より】

○　2018年12月１日付で『葬儀の手引き』を発行しました。2017年12月の司祭の集いで話し合われ、その後の司祭評議会でまとめ、宣教司牧協議会からも参考意見をいただきながら作成しました。仙台教区の中で行われる葬儀について、地域性や各小教区での特色はあるにせよ、教区としての基本的考えを教区内で共通認識を持っていただくために葬儀の流れと信徒に任せることが出来る葬儀の流れの中の祈りの式文を掲載した『葬儀の手引き』となっております。各小教区、各地区において、まず司祭と共に『葬儀の手引き』を基にした話し合いを持ち、地区内で、あるいは小教区で地区内の小教区の葬儀の形を確認することが大切です。ご不明な点がある場合には、教区本部からも説明に伺う準備もしてお

りますので、なにとぞよろしくお願いいたします。なお、『葬儀の手引き』は小教区の信徒の数だけ発行はしておりませんが、どうしてもさらに必要な場合は本部まで申し込んで下さい。追悼ミサを依頼するための封筒も教区本部で準備しておりますので併せて申し込んでいただければと思います。

小松 史朗　神父

各地区からのお便り

第１地区より

新年の鐘つきと祈りと ケベック宣教会来日 70 周年記念ミサ（本町教会）

１月１日（火）、午前０時とともに教会の鐘の音が響き渡る。新しい年の幕開けです。

本町教会では 16 年前から新年を祝い、新しい年に向けそれぞれの祈りを込め参加者全員で鐘つきを行い、聖堂で祈りを捧げています。今年は教会委員会の對馬委員長はじめ９名が参加しました。本町教会はその昔、浜町教会と言われていたこともあり、青森港のすぐそばにあります。ねぶた祭の最終日には海上運行と花火大会を間近で見ることができます。

元日午前 0 時には停泊中の船から霧笛が鳴り響きます。教会の鐘の音と霧笛が静寂した夜の街に響き渡ります。鐘つきの模様は「青森市内のカトリック教会ホームページ」（行事・活動）に動画をアップしておりますので本町教会の鐘の音を聞くことができます。ぜひアクセスしてみてください。

１月 13 日（日）毎年恒例の合同新年会が行われました。今回はこの日に合わせケベック外国宣教会来日 70 周年記念ミサを行いました。東京の赤堤教会、仙台の元寺小路教会で行われた記念ミサの後、ぜひ本町教会でもとの信徒からの熱い声に準備を進め、県内各教会へも案内を出し 200 名を超える参加者が集いました。青森県は 1949 年からケベック外国宣教会が担当になりました。

本町教会での記念ミサにはケベック外国宣教会からガブリ神父様、エメ神父様、ロワゼル神父様、信徒宣教者３名、当時ベランジェ神父様から本町教会を引き継いだ事務局長の小松神父様も教区本部から来てくださり、祭壇にはレネ神父様をはじめ五人の司祭が並ぶ青森では珍しい豪華なミサとなりました。

ミサの後はケベック外国宣教会来日 70 周年記念祝会を兼ねた新年会が行われ、各教会代表者からの祝辞と思い出話、小松神父様からは司祭館にまつわる当時の秘話も聞くことができました。そして信徒から提供されたケベック外国宣教会の神父様たちとの思い出の写真を弘前のミゲル神父様がスライドショーにしてくださり、会場のスクリーンに映し出された画像に皆、昔を懐かしんでいました。

懐かしい話に花が咲き、他の教会の方との親睦も図れ、最後は恒例のビンゴゲームで大盛り上がりで楽しいひと時を過ごしました。

後日、ガブリ神父様から届いたお礼のメールにはカナダに戻られたラベ神父様、デュベ神父様からのメッセージも添付されていて感激しました。

張間 成就（本町教会）

第７地区より

２つの小教区の子どもたちが 合同でクリスマス聖劇を披露しました

昨年のクリスマスに第７地区の松木町と野田町の小教区では、保育園生から小学６年生までの 18 人の子どもたちによるクリスマス聖劇を観て、大きな感動を受けました。コングレガシオン・ド・ノートルダム修道会の Sr.安田と松木町教会の洞江さんたちが昨年の９月から聖劇の練習を始めました。

始まった当初、18 人はまだバラバラの状態。家族、所属教会、学校の違いがあり、そしておそらく聖劇の経験がなくイメージもなかったと思います。Sr.安田と洞江さんの指導のもとに、また親御さんたちも協力し、子どもたちはだんだんとまとまって『劇団』となっていき、そして同時に、クリスマスの誕生の神秘を私たちに伝えることができるようになっていきました。衣装や小道具も手作りとは思えないほどすてきにできあがりました。クリスマスイブとクリスマスの日、大人たちは最初のうちはほほ笑ま

しく 18 人の姿を見ていましたが、その真剣な姿に次第に、喜び・祈り・賛美の雰囲気を感じ、一人一人の中にある、神様を慕い求める気持ちと救い主がお生まれになったことの喜びを改めて大きく感じながら、その後に続くクリスマスミサを捧げました。

渡邉 祐子（野田町教会）

第８地区より

タリタクムセミナー

11 月 17 日、カトリック郡山教会において、日本カトリック難民移住移動者委員会（J-CaRM）の人身取引に取り組む部会主催のセミナーが、開かれました。

野田町教会（福島市）のエメ神父の開会のあいさつのあと、山岸素子（J-CaRM 定例委員）さんの「急増する技能実習生の実態と問題点」についての講演があり、つづいて佐々木史郎（全統一労働組合書記長）さんの「ベトナム技能実習生支援の具体的な問題解決への取り組み」の報告説明がありました。その後、分かち合いとして、セミナー参加者が5～６人のグループに分かれ、感想や意見を交換しました。最後に司会進行のシスター塩見によるまとめの後、閉会となりました。

タリタクムとは？
マルコによる福音書５：３８－４３にある「Talita Kum 少女よ、起きなさい」に由来し、日本カトリック難民移住移動者委員会の人身売買に取り組む部会の呼称

山岸さんは、今、注目されているベトナム人技能実習生がおかれている状況を説明しました。技能実習生は、技術習得を目的として来日しているはずなのですが、少子高齢化の日本では、人手不足を補う「安価な労働力」として扱われており、低賃金、長時間労働、セクハラ、労働災害、強制帰国などさまざまな問題が起きているそうです。それは外国人労働者の人権を守る制度が日本にはないためで、実習生たちは過酷な労働環境でも働かざるを得ません。さらにベトナムの技能実習生たちは来日するために借金をしており。本国の送り出し機関と日本の受け入れ機関（監理団体）の双方に、手数料として百万円以上の借金をしています。実習生は、実習先の移動が基本的に認められず、訴えることも、逃げることもできません。文化や科学技術に優れた先進国としての日本にあこがれてやってきた技能実習生が人間として扱われていない現実があります。

◇教会でできることとして山岸さんは次のようなことを提言しました。

・技能実習生かな？という人を見かけたら、話しかけてみてください。
・教会のイベントなどに誘ってください。
・何か教会でできることがあるか、やってみたいことがあるか聞いてみてください。
・日本語を学びたいという希望があったら、ミサの後、日本語教室を計画してみてください。
・もし、困っている問題を相談されたら、まずは、本人の訴えをよく聞き取り、緊急対応が必要かどうかを考え、教区のセンターや CaRM などに対応を相談してください。

佐々木史郎さんは、カトリック教会と全統一労働組合との関わりを説明した後、郡山で、技能実習生が除染作業をさせられていた事実を報告。彼らが契約した技能実習職種は「型枠施工・型枠工事作業」「鉄筋施工・鉄筋組立作業」でしたが、インターネットなどの報道で、自分たちの仕事は除染ではないかとの疑問を抱き、支援者と共に市役所を訪れ、作業中の写真を示したところ間違いなく除染作業をさせられていたことを知りました。除染作業に先立つ説明や同意はありませんでした。「ピッ、ピッ」の音が何かわかりませんでした。除染作業員には国から危険手当として１日６千円が支払われているのですが、技能実習生には雇い主から「危険手当」といわれ２千円が渡されました。それで、「自分は危険なことをしているのか」と思ったそうです。２０１８年１０月１９日、法務省は技能実習生の除染作業について調査結果を発表し、郡山の当該企業に対して「受け入れ停止３年間」と「改善指導」、監理団体に対しては「改善指導」の処分を行いました。除染や原発廃炉のための作業は、絶対必要ですが、安全基準と労働基準が確実に担保された条件の下で行われるべきであり、自分の健康チェックもできない技能実習生を使うような方法であってはならないと結びました。

小湊 博子(郡山教会)

川内村訪問―仮設住宅同窓会―

１０月8日　川内いわなの郷体験交流館

東日本大震災と福島原子力発電所の事故によって郡山の仮設住宅で６年間の避難生活をなさった村民の方々の「同窓会」が開かれました。郡山教会から１４名が同窓会のお手伝いにうかがいました。

川内村には７５歳以上の高齢者が６４４名、９０歳以上が１２３名おられるそうです。当日はあらかじめお声をかけた８０歳～９０歳の方々を中心に、３４名が出席しました。ちなみに、川内村の人口は２、６８２人、今年の川内中学校の卒業生は２名、小学校の卒業生は１０名、保育園の卒業生は３名だったそうです。

午前１１時から午後１時半まで、「お話」を聞いたり、「ナツメロ」を歌ったり、「ビンゴ」ゲームをしたり、笑い声と歌声が会場にあふれました。

「仮設にいたときは良かった」

同じ村に住んでいても家にこもる生活が続き、なかなかお互いに顔を合わせることができなかったお年寄りには良い機会になったようです。

小湊 博子（郡山教会）

小名浜教会

ああ閉堂式

昔、仲のいい４人兄弟がいました。４人とも自分の家族と家を持っていましたが、ある時、神は長男に新しい大きな家と兄弟を養うようにお金を渡しました。

２０１９年１月１３日、平賀司教の司式のもと小名浜教会閉堂式が執り行われました。いわきの信徒や中通りの信徒、原町、第７区の信徒まで駆けつけてくれて、総勢１５０人が新たに主と再契約をいたしました。

聖堂はなくなっても家族は残ります。家族が１つずつバラバラでいるよりも、４つの家族が１つの共同体として、キリストの体を形づくることを主は望まれたのでしょうか。

信仰とは、変わることという人がいましたが、共に神の前に立ったとき、既に私たちは変わってきていることに気づかされました。それは希望のもとに。

ありがとう小名浜教会。そしてさようなら。

志賀 秀輝（いわき教会）

（注：2005 年からいわき市内の４つの小教区は、平教会を新しく建て替え、いわき教会となり、残りの小名浜、湯本、勿来は巡回教会となりました。その後、勿来教会は無くなり、このたび、小名浜教会がこれ以上使用するのは危険であるとの判断により、閉堂になりました。教区広報委員会）

第３地区より

釜石教会復興支援

クリスマス・コンサートと荘厳ミサ

2018 年 12 月 15 日、釜石・大槌地区のキリスト教会や関係団体で組織する「みんなのクリスマス実行委員会」主催による復興支援クリスマスコンサートが、釜石市大町の市民ホールＴＥＴＴＯで開催されました。コンサートは地元のゴスペル愛好者らで構成された聖歌隊の「もろびとこぞりて」でスタート、約 250 人の来場者はクリスマスソングを楽しんだり、キリスト誕生の場面を記した聖書の朗読や東京上野教会主任司祭の晴佐久昌英神父によるクリスマスについての話を聴くなどしてクリスマス本来の意味をかみしめ、全員で「きよしこの夜」を歌ってコンサートを終えました。

ミサ後のクリスマス祝会

12 月 24 日の午後４時からは大只越(おおただこえ)町の釜石教会で「荘厳ミサ」が行われました。今年もイエズス会前日本管区長の梶山義夫神父の司式で行われたミサには、信徒の他に復興支援活動を続けるボランティアや震災以来毎年ミサに参加し祝賀会を企画運営するため釜石を訪れる東京の田園調布雙葉学園の高校生等約 100 名が聖堂に集い、震災犠牲者に思いを寄せながら祈りを捧げ、キリストの降誕を祝いました。　　真山 重博(四ツ家教会)

盛岡・志家教会の英語ミサ

盛岡の志家教会では 2018 年 10 月から毎月最終日曜日の主日ミサは英語で行われています。日本人、外国人信者が一堂に会して英語で主日のミサにあずかっているのは、少なくとも仙台教区では志家教会だけではないでしょうか。

以前はベトレヘム会のスイス人の神父様がおられたため、月に一度くらいの割合で日曜の午後、外国人信者のために英語ミサが行われていましたし、その後グアダルペ宣教会のメキシコ人の神父様がいらして、同様に英語ミサもしくはペルーなど中南米出身の方々のためにスペイン語のミサが行われるようになっていました。しかし、神父様が少なくなり３年ほど前から英語ミサ、スペイン語ミサは行われなくなりました。

そもそも第３地区の神父様は現在３人で、主日には広い岩手県内を一人は９：00 宮古、11：00 釜石、14：00 遠野と回り、一人は６：30 修道院、９：00 花巻、11：00 北上、盛岡では９：00 四ツ家、11：00 志家、14：00 上堂でミサを捧げていただいています。一昨年からフィリピンとインドネシアの神父様が来られ、「また英語ミサを」との要望が神父様にあったそうですが、この体制の中、盛岡でもう１回英語ミサというのは困難な状況でした。このため「月に一度でも主日のミサを英語でするというのはどうか」と神父様から志家教会信徒会の方に打診があり、「高齢者も多いしどうかなあ？」という意見もありましたが、信徒の委員会に諮ったところ、やってみようということになりました。主にフィリピンの方たちが進行から聖歌まですべて担当してくださり、日本人の私たちはプチ海外旅行気分でミサにあずかっています。

ミサの流れは同じなのに何となく不安で、対訳を必死で追い、歌える聖歌は「アマナミン(主の祈り)」ぐらいでオロオロしていますが、逆に外国人の方はいつも同じ思いでいたのだろうなと今更ながら感じました。もちろんお説教は英語の後に日本語でもお話しいただいてるのですが……。しかし、それと同時に英語ミサ後、本当にうれしそうなフィリピンの方々のはじけるような笑顔に会い、ミサにあずかれた喜びがひしひしと伝わってきます。本来ミサにあずかるってそういうことだったはずでした。毎週当たり前のようにミサにあずかることができるのはどんなに幸せな事か忘れていたようにすら感じています。

英語のミサの時は欠席、もしくは他の教会で日本語のミサにあずかるという方もいらっしゃいます。それでも続けていくことで他の教会では得られない交流や分かち合いが生まれ、いい感じになって行けばなあと願っています。　　沼田 由子(志家教会)

第４地区より

大籠教会にて

仙台から「大籠を守る会」の方々が大籠教会を訪問されました。私も同席させていただきましたので、その時のことを報告いたします。平成 30 年 11 月 23 日（勤労感謝の日）、「大籠を守る会(会員数 200 名)」の有志の方々と高橋 昌神父（水沢教会）さま、そして仙台からパウロ神父さまが大籠教会を訪問し、巡礼ミサを捧げました。

大籠教会は、曲がりくねった道を、雑草が生えた田畑を横目に見ながらたどり、澄み切った小川を越えると、雑木林の中にぽつんと建っております。当日は、小雨がぱらつく中、ちらほら白いものも交じるあいにくの天気でしたが、ミサが始まる頃には、青空も見えてきました。

今から数百年前、この地では幕府によって約300名もの人が首を落とされ命を亡くされました。教会の近くには、首塚の石碑もあります。300 段の階段を登った上には、ローマ法王からのメッセージや、見るべきものがたくさんあります。

ミサ中、お説教の中で聖書の一節についてお話が始まると、皆は一瞬静まり返り、大昔この大籠でおきた不幸を思いつつ、心を打たれました。

これからも、「大籠を守る会」の会員が増えることを願い、全国的に知名度を上げて、大籠へたくさんの方々が訪れることを、お祈りいたします。大籠教会は、現在無人の教会です。ここが、年に何回かのミサでは、あ～さびしい。　末廣 順士（千厩教会）

第５地区より

子どもの祈りの集い　広瀬川巡礼

今年度で８年目を迎える「仙塩８教会 教会学校・子どもの祈りの集い」の「広瀬川殉教碑への巡礼」が２月１１日に行われました。

はじめに元寺小路教会に集合して、リーダー作成の映像を使って易しい歴史の勉強をした後、西公園の殉教碑まで徒歩で移動、殉教碑の前でフェルディ

神父の司式で祈りを捧げました。子どもたちも分担して共同祈願やお花を捧げたり、最後に「おおしくも」の聖歌をみんなで声高らかに歌いました。

昨年は大雪のため初めて聖堂内の殉教碑の前で祈りを捧げましたが、今年は天気にも恵まれ、幼児からこの催しに関心をもっていただいた大人の方まで約４０名の参加となりました。

祈りの後、４００年前に殉教者たちが責め苦にあった広瀬川のほとりで子どもたちの無邪気に遊ぶ姿に、この平和な時間がいつまでも続きますようにと祈らずにはいられませんでした。

教会に戻って温かい芋煮とガンボスープをお腹いっぱい食べて、心も体も暖まりました。

来年も２月１１日に行いますので、皆さんのご参加をお待ちしています。

佐藤 みか（北仙台教会）

（注：ガンボスープは、米ルイジアナ州のトマト仕立て料理）

〈特集〉

被災地の今 １

釜石より

震災から現在の釜石教会

「開放」→「共に」→「日常へ」

「ベトナムの方の鳴らす鐘は、やさしいね」と、あるボランティアの方がおっしゃいました。現在、釜石教会では１０人近くのベトナムからの若者たちが、ミサに来ています。被災された方も、新たなメンバーに加わり、一緒に祈っています。８年前には想像すらできなかった光景です。東日本大震災から、現在まで、釜石教会は、三つの言葉で表すことができるのではないかと、思い起こしています。

開放

はじめに、「開放」という言葉がふさわしいでしょうか。震災直後、信者数人で「小さなカリタス」として、泥かきや炊き出しを教会で行いました。近所の方々に向けてです。今でも続いている「パッチワーク毛布づくり」は、インドの路上生活者のためですが、それとは違い、顔を合わせての炊き出しは、近所の方々にとって、教会が開放された印象を持ったようです。また、全国からの物資が届き、ボランティアも来て、教会がカリタス釜石ベースの活動拠点になったことは、場所も信者の思いも「開放」へ向かわせたことを決定づけた感じがします。信者の中には、そのことにとまどいもあったようです。自分たちの教会から、地域へと視線を向け、実践することが少しずつ形づくられた期間でもありました。もちろん、カリタス釜石のスタッフも教会委員会に出席して、活動やイベントのお知らせを伝え、双方の理解に努めたことも大きいと思います。

共に

次第に、ボランティア活動も本格的になりました。教会ホールは、お茶が飲めるスペースになり、サロンが行われる場所へ。信者も顔を出し、あいさつや話をするようになりました。また、クリスマスや復活祭の祝賀会では、地域の方々も参加しました。「共に」過ごす機会が増えました。これが、次の展開を表す言葉かと思います。老若男女、被災された方、そうでない方、様々な方々と共に。ある時の復活祭では、住宅で悩む方、自分を傷つける１０代の子と、同じテーブルを囲むこともありました。「共に」という言葉は、なんと奥深いことか。信者同士で話したこともあります。

日常へ

サロンでは、利用者の入れ替わりが時々ありますが、定着してきたようです。ボランティアの数も少なくなり、町中も落ち着いてきたようです。ここ２年ぐらいは、「日常へ」と言う段階に入ったように思えます。ボランティアの代わりに、ベトナムの若者が多く訪れるようになりました。いわゆる技能実習生です。若者たちは、熱心に祈ります。朗読や侍

者の役割もこなします。釜石教会では、それが普通になってきました。現代の社会情勢を感じながら「日常へ」となっています。70代以上が多い釜石教会では、うれしいことです。高齢化と向き合いながら、新しい仲間とのこの「日常」をどう過ごしていくか。現在、釜石教会では、喜びをもって、向き合っています。　　千田　栄（釜石教会）

亘理より

亘理教会は、被災地域にある小さな教会です。震災後、地域のために何かしなければと思いながら自分たちのことで精いっぱいでした。そのようなところに各地の教会関係者のご支援ご協力を得て、被災者支援活動の拠点となることができた。

2015年4月にマリアの宣教者フランシスコ修道会（以後FMM）が亘理教会から5分と離れていない所に修道院を設立した。その開設に合わせ、森夫妻（奥さんがFMMが運営する病院と係りがあった）が、自分たちが作ったいちごをもって修道院を訪れた。奥さんは、あの日、働いていた施設で厳しい体験をし、「私だけ生きていていいの？」という気持ちを抱えていた。その心の傷を癒すために、同時期に脱サラしていたご主人と始めたのが、森ファームである。しかし、二人とも農業とは縁がなかったので、大変な苦労をしていた。私たちはその話を聞いて即座に森ファームを支援することにし、仙台ダルクのボランティアと一緒に、森さんたちのいちご栽培を応援している。

現在の亘理地域の被災者は、仮設住宅から復興住宅や自宅に移り住み、全ての仮設が閉鎖となった。それに伴い、八木山教会が始めた被災者支援活動「八木山オリーブの会」も会場を亘理教会に移して行うことになった。それを機に、「八木山オリーブの会」は八木山教会の有志の方々の協力を得て亘理教会が主体的に行う「オリーブの会」となった。その会も、今年1月で通算135回を迎えた。被災者の方々は、新しい住居に移っても人と話をする機会が少ないと嘆く。だから「オリーブの会」に来て、皆で一緒に食事をしたり、話をするのがほんとうに楽しみだと口をそろえて言う。教会に集まるので自然と祈りの機会が増え、祈りが被災者の心を和ませていると感じている。

亘理教会は小さな教会のため、オリーブの会に被災者が集まると、手狭で分散しないと行えないような状態だった。また、FMMのシスターの働きで外国籍の子どもたちがミサに集まるようになると聖堂が狭く窮屈。その時の亘理教会の状況を改善しようと、渡邊神父主導のもと教会の大改修へと進んだ。新しい聖堂は、障子張りの明るく、家庭的な落ち着いた雰囲気を醸し出している。初めて教会に来ていただいた人からも「落ち着いた良い教会ですね。」と言われている。新しく生まれ変わった教会、そこが「人が集まる教会に」との思いが募る。

被災地では、新しい住居での生活、海岸線には巨大な堤防の構築等インフラは整ったものの、人の心の傷はまだ癒されていないように思う。だから、教会は救いを求める人たちの居場所に、そして、少しでも心の支えになれたらと願っている。

震災後もうすぐ8年、その間、神さまが計ったように、私たちが想像もしていなかったことが次から次へと現れた。これも、亘理教会を支えていただいた皆さまのお陰と感謝しつつ。

長嶋 治夫（亘理教会）

宮古より

あの日から

いつもの朝、いつもどおりに出勤したあの日。
夕方には帰る家どころか、住んでいた町がなくなっていた。
人は思いもよらないことが起きると考えることをやめ、感情をどこかにしまいこんでしまうものかもしれない。
その時から口ぐせは「大丈夫・・・」。
なにが大丈夫なのかはわからないが、自分へのおまじないのように繰りかえしていた。
経験したことのない大きな揺れ、灯りの消えた街、雪のやんだ空いっぱいに輝いていた星・・・。
津波の映像はあとから見た。
あれから8年目になろうとしている。
日常をとり戻そうと前しか見ないで、ただただ生きてきたけれど、少しだけふり返る余裕はできたのかもしれない。

あの日、失ってしまった小さな命。
あの子は心だけになって幼稚園に帰ってきた。
生きていたら中学1年生になるはずだった。
街はどんどん様子をかえて、あのとき見えていたものが見えなくなってきている。
「復興」の先にある未来に目をむけて歩んでいかなくてはならないのだろうが、今でもあのときの寒さが体のどこかに残っている。
そして、あの日の満天の星空がよみがえる。
写真集「生きる」に添えられた「あの夜、海へ空へ帰らざるをえなかった人々にとって、あの輝きは道しるべにも似た光だったのではなかったか・・・」

の一文。
どうぞ、その星の光が残された人の心にもとどき、ひとすじの希望の光となりますように。
残された人たちの心に平安がもたらされますように。
心のなかで祈りを唱える。

加藤 敏子（宮古教会）

原町より

2011年３月11日（金）にあの震災に遭いました。震災前の原町教会のミサの参加者は１０人から15人程度でした。教会は海からは約８ｋｍ、原子力発電所からは約２４ｋｍにあります。信徒の津波の犠牲者はいませんでしたが地震によって教会のモルタル壁、天井、屋根などボロボロに崩れ、雨漏りがして使用不可の状態でした。

さらに地震・津波に引き続いて原発が爆発し、双葉地方（原発の近くに住む）信徒がどんどん避難しました。南相馬市に住む私たちにも屋内退避が出て、なすすべもなく壊れた教会を閉じて各避難場所に行きました。大阪や東京や埼玉やいわき市などに避難した信徒たちは、そのまま転出の形をとり、教会の信徒は激減しました。

そんな中、梅津明生神父様が２０１１年６月から原町教会に常駐され、教会の修繕のことや多くのことで助けてくださいました。物事を相談でき、回答を得られる神父様が常駐されることに私たちは希望を持ちました。その後、名古屋教区からの狩浦正義神父様が常駐され、今では幸田和生司教様が常駐され、私たちは落ち着いてミサにあずかれるようになっています。

世界中の人々、日本各地の教会のご支援で、原町教会は修復され、カリタス南相馬もでき、今でも多くのボランティアの方々がこの地の復興に携わってくださっています。毎日曜日教会を訪れる人も増え、教会は以前とは変化した形で立ち直ったように見えます。

私はカトリック教会の絆、連携の強さを改めて感じます。助けてくださった各教会の方々に感謝でいっぱいです。

ただ、あの震災から８年も経ちますが、私は、この時期いろいろな意味で毎年心がざわつき落ち着きません。あの時、身近な人がたくさん亡くなったこと、日本国中が恐ろしさの底にあったこと、特に避難していった原発周辺の信徒を含む住民が死に物狂いであったことを忘れてはいけないと思っています。原発事故は終わってはいないし、他人事にしてはいけないと思っています。

高野 郁子（原町教会）

いわきより

震災から８年の漁業を振り返って

震災当日、漁を終えて船を停泊係留し自宅にいた漁師の中には、大津波警報を聞き港へ急ぎ津波に胸まで浸かりながら甲板に這い上がり、船を沖出しした人たちもいた。

また、沖で操業中の漁船は、津波による海面の異常を感じながらも、船は波に浮くため安全と判断し沖合に留まった。しかし陸上の被害は見当がつかず、船に積み込んである漁獲物の出荷を心配するなど、気持ちは動転していた。

福島の漁業は、震災後の平成24年から、小規模な操業と販売を行い、流通先の確保と出荷先での評価の調査を目的とした試験操業を行っている。そのため出荷量は少なく、震災以前では当たり前であった近所の魚屋さんに行けば地元の魚がすぐに買えるという状況ではなくなってしまった。

放射性物質については、漁獲の毎に検査を行い、安全が確認された魚しか流通させてはいないが、「やはり安心は出来ない」という気持ちの払拭までには至っていない。

震災によって漁業者も仲買加工業者も被災した。漁業者と仲買人は車の両輪とも言われるが、利害においては相反する。被災当初の時期には、この利害を取り去って被災した者同士が一緒に力を合わせ、新たな組織と新たな発想で漁業界を新たに復興させようと手を取り合った。

しかし、賠償金等で生活や気持ちが安定してくると、当初の大きな志は徐々に小さくなってしまった。

震災からもう８年になるが、この間の私自身を振り返ると、漁業の復旧、復興の掛け声の中、漁業に関わるさまざまな問題に直面するたびにひたすら神にすがりながら、問いかけながら生きてきた感がある。

何か目に見えて積み重ねたものはあったのだろうかと自問する。

今まで一生懸命に積み上げたものは何であったのか、まだ時間が経過しないと分かってこないのかもしれない。

吉田和則（いわき教会）
（元いわき市漁業協同組合 専務理事）

大船渡より

新しい年になりました。

新しい年を迎えるたびに指折り数える習慣が身についてしまいました。

あのときから８年になります。

私は５年間を一関市のみなし仮設で暮らし、2016年11月に大船渡市の災害者住宅に入居いたしました。

私が暮らす市営住宅Ｓアパートは大船渡市の最終の災害者用住宅です。商業地も「キャッセン」の近

辺に集約され、住・生活環境はひととおり整備された、と言えるかもしれません。港湾工事も市広報によると８割が整備・完成されているそうです。近頃では、市広報にもかならずしも災害に伴う記事が掲載されているわけでもなく家賃の減免や助成金のことなど単発に記事化されているのが現状です。

昨年2018年１月、地域公民館Sアパートが設立されました。

盛（さかり）・地区公民館の「人口統計」が配布され、盛14地区（災害者住宅３地区含）の中でダントツ当住宅の高齢化率51.4%（60歳以上計算）でした。私の中では、稼働者が多くこれほどの高齢化を想像もしていなくて、本当にビックリでした。それは、高齢であっても健康で働く場を持っている、生活の維持のためにも働いている、ということなのでしょう。移動入浴車もデイサービスの送迎車も住宅に来ています。他会の病者の介護保険手続きを問われて…個人情報の壁を経験しながら少しの手伝いが出来たかもしれません。現在、週２回のヘルパーが訪問しています。

手芸だったり健康づくり体操だったりカリタスのボランティアだったりに協力していただきながらちょこっとの心のケアを気遣い、公民館主催の歌声サークルや朝のラジオ体操、健康マージャンだったり…どこかに誰かが、関わったり繋いだりしている、そんな事を期待したり想像しながら、間もなく９年目を迎えます。　　佐藤 優子（大船渡教会）

教区の諸活動

クリスマスキャロルの喜び

「 愛は、言葉によって語られ、言葉が足りないときそれは行為で示されています。
行為が十分でないとき、愛は、音楽を通して伝えられます。創造は、神の音楽です。」
― Segundo Galilea、「神の音楽」―

音楽はさまざまな年齢、社会的、経済的、政治的、宗教的、また、文化の多様性から見ても人々を結びつける力を持っています。それは私たちを動かす力を持っています、特にクリスマスの間、キャロルは歌手と聴衆を同じように結び付けます。

去年の12月、The“ I sing for Joy”コーラス;(仙台教区国際青少年合唱団)は、カリタスの丘、小百合園、石巻カリタスベースでクリスマスキャロルを歌いました。しかし、この聖歌隊グループはクリスマスシーズンの間だけでなく、招待によってさまざまな教会や施設で一年を通して歌い、活動しています。

The ISJ コーラスは、仙台教区青少年育成部、および仙台教区外国人支援センター（SDSCF）の協力により、教皇様の使徒的勧告「福音の喜び」の（第23項）の中で、『・・・・　あらゆる人に、あらゆる場所で、あらゆる機会に、ためらうこと、嫌がることなく、恐れることなく、福を告げるために出向いて行くことは重要です』と言われたフランシスコ教皇様のチャレンジと勧めに応え、また、2017年４月の世界青年の日のための、教皇様の青少年へのメッセージ、『乙女マリアのように、世界をより良い世界にするための手段として自分の人生を与えていくこと』に応えて組織されました。

そして、福音を広め、より良い世界に貢献するため、音楽を通して、行うことは、とても良い方法だと思います。

2018年４月以来、The ISJ コーラスは、毎月第２および第４水曜日に定期的に集まり、午後６時から午後８時30分まで、元寺小路教会で練習をしています。８つの異なる国籍からなる約25人のメンバーがいます（もちろん、それには日本人も含まれます）。

The ISJ コーラスは、たとえ、ある人が良い声を持っていなくても、歌うことに興味がある人なら、どなたでも招待しています。
重要なことは、喜びと愛をもって、他の人と自分自身を分かち合っていきたいという心の広さとその意欲です。　　クレア・サンチェス
（注；ISJ コーラスとは、“I sing for Joy”コーラスの省略）

カトリック仙台教区「子どもと女性の権利を守る委員会」活動報告

教皇フランシスコが毎年の四旬節・第二金曜日に設定した「性虐待被害者のための祈りと償いの日」が、今年は３月22日でした。世界中で教会のつまずきの石となっている不幸な出来事を防止しようと、2016年12月６日に仙台司教区に「子どもと女性の権利を守る委員会」が設置され、任期２年の信徒の委員６名と教区司祭１名、教区長の８名が月に１回定例会を開き、子どもと女性の権利を守るための啓発活動を展開、相談・通報窓口（Tel 090-5187-4959 火曜と木曜の 10:00～16:00）を開設しています。昨年３月18日には北仙台教会を会場に、竹之下雅代氏（ウィメンズカウンセリング京都）による講演会を、カトリック中央協議会「子どもと女性の権利擁護のためのデスク」と共同開催。７月21日には、「札幌司教区ハラスメント対応デスク」との合同研修会を元寺小路教会で実施。今年はLGBTの方々との対話や、カトリック中央協議会のデスクや他の教区との連携を課題に、身近な問題から啓発に取り組む予定です。もうこれ以上、父なる神を悲しませることのないように、「この最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。」（マタイ25:40）というイエスのことばに従い、聖霊の導きのもと、小さな兄弟姉妹の声に耳を傾けていきたいと思います。

菊森 拓也（北仙台教会）

ボランティア活動学習会　「今、なにをすべきか、なにができるか？」

主催：チーム・カリタス仙塩

仙台市内と塩釜の８つの教会の有志による東日本大震災被災者支援グループ「チーム・カリタス仙塩」は、去る11月10日（土）、元寺小路教会において仙台教区サポートセンターと共催でボランティア活動学習会を開催しました。

私たちのチームは、現在、石巻ベースの活動に参加しています。震災後まもなく８年目を迎えようとしている今、「私たちはなにをすべきなのか？なにができるのか？」をあらためて自らに問い直すとともに、これまで活動に参加したことのない方にも、ともに考えていただくきっかけになればと企画しました。

講師は、日本カトリック信徒宣教者会（JLMM）事務局長の漆原比呂志（うるしばらひろし）さん。

漆原さんは、仙台教区サポートセンターの開設にも深く関わり、CTVC（カトリック東京教区ボランティアセンター）事務局長として福島県での支援活動にも従事しておられます。「教会のミッションとしてのボランティア活動」をテーマに、発展途上国での豊富な活動経験も踏まえて、信仰者として支援活動をどう捉えたらよいのかなど、とてもわかりやすくお話ししてくださいました。

発展途上国での活動も被災地支援も「支援というより、当事者に寄り添うこと、ともに生きること」であり、カトリック教会の被災地支援活動は「信徒による宣教」であるとのことばは、受講者にとって大きな気づきでした。①寄り添い続ける　②分かち合う：支援するだけでなく自分自身が強められる　③立場が違っても互いに尊重し合う　④祈りへと招かれる：一日の活動を終え、信徒ではない人、教会を離れた人もともに祈る、という活動の在りようは、まさに「宣教の大きなサイン」であること。「石巻ベースでのミッションは、『みんなが笑顔になれる』『家族のような関係』『人と人をつなげる』『居場所づくり』『学び合いの場』『誰かのためになる』ことです。そして、ボランティア活動に参加している人自身が楽しみながら活動に参加し、その体験を教会で皆と分かち合い、よそ者であっても、経験が乏しい人であっても大丈夫だと伝えることで、理解が深まり、活動の輪が広がっていくことでしょう」と述べ、私たちの小さな働きにも大きな意味があることに気づかされ、今後への大切な示唆をいただくことができました。

支援する・支援される関係を超えて、「仲間になる」ことによって、「心の中のカリタスさん」が動き出し、それが「ともに生きる」ことになるよう、これからも迷わずに活動を続けていきたいと勇気づけられました。

園部 英俊（元寺小路教会）

司　祭　紹　介

広報委員会は、神父さまがたをご紹介するにあたって、次の４つの質問をいたしました。
⑴司祭になりたいと思った動機（きっかけ）はどのようなことですか？
⑵司祭としてこれからも大切にしたいことはどんなことですか？
⑶今働いている地域の信徒、仙台教区の信徒へのよびかけ（希望）があれば、教えてください。
⑷その他、神父さまを知るためのエピソードや、アピールなさりたいことなどなんでも。

「能ある鷹は爪を隠す」鷹觜　達衛神父

現在 90 歳の神父様は、これまで「スペルマン病院」の理事長として１６年間尽力してこられました。昨年叙階 60 周年を祝われましたが、叙階以来、西仙台、畳屋丁、元寺小路、一ノ関、八戸、大湊、四ツ家、大河原、塩釜などの各教会で宣教司牧に携わり、ご病気のために引退されました。このほど、スペルマン病院理事長の席を仙台教区司祭・小松史朗神父に譲られ、現在は、理事の一人として働いておられます。

私がカトリック信者になったわけは……

私が、カトリック信者になったのは、まったく母のおかげです。

母は盛岡市出身で、盛岡白百合の卒業生でした。ですから私が子どものころは、学生時代に覚えたフランス国歌をフランス語で時々歌っていました。母はカトリック信者でしたが、父がお寺と深い関わりを持っていたため、結婚後、教会に行けなくなっていました。しかし、父が亡くなってからは、すぐに教会に戻り、20 年以上、教会のコックとして働き、教会の敷地の中に住んで、私たち子どもを育ててくれました。

私は、小学校６年生の時に、兄弟姉妹そろって洗礼を受けました。洗礼名はミカエルです。男３人、女３人の６人兄弟姉妹でした。

教会のコックの仕事で、６人の子どもを育てることは、容易なことではなかったと思うのですが、母はアララギ派の同人として短歌を詠み、またあるときは「岩手日報」主催の随筆コンクールで一等賞になったこともありました。短歌でも、随筆でも味わいのある文章を書く人で、私たち子どもも感心していました。そうそう、料理の本も出版したことがありますよ。それは、魚でも頭からシッポまで、全部おいしく食べられるという料理をしていたので、そのことが書かれていました。

少年時代の思い出

今、古川教会の司祭である川井啓神父が、小学校時代のガキ大将で、一緒によく遊び回りました。当時の仲間の中には、亡くなられましたが、のちの土井文雄神父などがいました。

中学時代から、ラグビーを始めました。香部屋の準備などの手伝いを教会でしていたので、練習で帰りが遅くなると、よく、母から怒られていました。

岩手医大から神学校へ

岩手医大の３年生の時、医学の勉強は自分にはどうしてもなじめませんでした。特に、生理学や薬学がおもしろくなかったですね。それに、医者の息子たちが勉強している所で、母子家庭で長男の自分が、高い学費がかかる学校で勉強をしているという違和感がありました。

教会で、いつも一緒だった川井さんが早稲田を卒業し、神学生となり、東京神学校に行っていました。私も岩手医大を３年で辞め、東京神学校に入学しました。20 歳の時です。（当時は、岩手医専と言っていましたが、マッカーサーの命令で、途中から岩手医大になりました。医大の学部１年の時に、上智大学の特別ラテン科に編入したという形でした。）

ところが、入学して１年もたたない頃、イエズス会のライフ神父が院長だったのですが、「ローマの神学校に行きなさい」と言われました。私が心配そうな顔をしていたのでしょう。「ローマの神学校は大したことはない。上智の方がレベルはもっと上だ」と言われ、ローマに行くことになりました。

ローマ留学

ローマで、哲学３年、神学４年を学びました。最上級生には、東京教区の沢田和夫さん、同級生には、亡くなられましたが福岡の司教だった松永久次郎君と１年下には後にバチカンの枢機卿になった濱尾文郎君がいました。

日本人はこの４人でしたが、ローマのプロパガンダ大学は、インターナショナルで、30 カ国から来た神学生が学んでいました。

通常、会話はイタリア語、自国語が話せるのは、日曜日と木曜日の昼食後だけでした。イタリア語を勉強したかったのですが、できませんでした。ただ、ラテン語を勉強していたので、何とか話すことができまし

た。

試験は、論文を出すことと、口頭試問でした。口頭試問は、１人10分と決められていました。同級生の松永君は、試験の部屋に入っていくと、毎回すぐに出て来ます。口頭試問が苦手な私は、「松永君、どうして、君はすぐ出てくるの。試験はどうなっているの」と聞いたところ、先生たちは、私が入っていくと顔を見て、私だと分かると「あなたに質問することはありません。出て行って大丈夫」と言われるんですよ、ということでした。松永君は、ものすごく優秀で、毎年、優等生には金のメダルが贈られるんですが、毎年、金メダルを受けていました。濱尾君も優秀で、いつもトップクラスにいました。私は、とうてい松永君にはかないません。そんな私を見て、ある教授神父が「どんな点数でも、パスはパスだよ」と言って励ましてくれました。

こうして、私は、1962年、ローマで30人の神学生とともに叙階の恵みを受けました。28歳の時でした。

絵のこと

ローマの神学校にいる時、夏休みが3か月あり、校長の神父さんが「この長い夏休みを利用して、何か自分の身につくことをしなさい」と勧めてくれました。それまでは、絵を描きたいとか思ってもいませんでしたが、芸術作品の多い、ローマに来たせいでしょうか、絵を習いたいと思いました。絵を描こうというグループの中には、濱尾君もいました。神学生の顔を描かせてもらったり、木を写生したりしました。

叙階後、日本からは「すぐ帰るように」ということだったのですが、私は、絵の先生のペリクレ・ファッチーニ先生と、当時ローマ近郊のチビタ・ベッキャでフレスコ画を描いておられた長谷川路可先生から推薦状をもらい、仙台の小林有方司教に、滞在延長をお願いしました。ファッチーニ先生は、バチカンのパウロ６世ホールにある「復活のキリスト」の大彫刻の作者でもあります。

そんな先生方の推薦状がきいたのでしょう、半年の延長が認められ、帰国直前に、神学生時代にはできなかったフィレンツェ、ピサ、ボローニャ、ベニス、パドワ、ナポリ、ポンペイなどの街や教会を巡り、スケッチすることができました。

日本に帰ってからは、教会で、絵画教室を開いたりしたこともあります。

透析を10年以上続けており、現在は、週3回受けています。１回に4時間半かかります。今は、歩くのが一苦労になりました。朝早く起きられないときもあり、教会でのミサを担当することもできなくなりました。そのため、皆さまにお目にかかれる機会も少なくなったのが残念です。

訃　報

フェデリコ・エノラ・テノリオ　神父
（グアダルペ宣教会）

1974年　来日
白河教会、喜多方教会、八木山教会、北上教会、京都教区で宣教司牧にあたる。
2004年　帰国
2018年12月31日　帰天 於 メキシコシティ、享年73歳
葬儀ミサが、本年１月８日（火）午前11時（現地時間）グアダルペ宣教会大神学校礼拝堂にて執り行われた。

シスター・M・アウレア　相澤 ユキ子
（殉教者聖ゲオルギオのフランシスコ修道会）

1939年　北海道室蘭市生まれ
1959年　室蘭教会において受洗
1962年　殉教者聖ゲオルギオのフランシスコ会入会
1967年　初誓願
1974年　終生誓願
2018年　11月23日　帰天 於 青森市内病院、享年79歳

入会のころからの望みは、「恵まれない子どもへの奉仕」であり、一年間大学で社会福祉の勉強をし、その後、青森市の藤聖母園と一関市の藤の園の児童養護施設で30年間奉仕し、その後は青森藤聖母園法人事務局で会計係を務めました。いつも困っている人の側に立ち、悩んでいる人に優しく、子どもたちに対しては、とてもあたたかく心にかけていた。

司教日程

4月	2日	火	仙台白百合女子大
	3日	水	東京カトリック神学院開校ミサ
	5日	金	郡山ザベリオ学園
	8日	月	部落差別人権委‥事務局会議
	11日	木	人権を考える委員会
	14日	日	受難の主日
	17日	水	聖香油ミサ
	18日	木	主の晩餐
	19日	金	主の受難
	20日	土	復活徹夜祭
	21日	日	復活の主日
	22日	月	カリタス南相馬法人設立総会
	23日	火	白百合学園教頭会研修会
	28日	日	第1地区堅信式（青森）
	30日	火	CND修道会（誓願金祝）
5月	2日	木	山口市へ
	3日	金	津和野‥乙女峠まつり、列聖開始ミサ
	7日	火	部落差別人権委・定例委
	10日	金	仙台教区サポート会議
	11日	土	松丘教会ミサ
	14日	火	司祭評・定例会
	17日	金	カト小中高春の総会
	19日	日	福島市（野田町）堅信式
	23日	木	狭山支援集会
	24日	金	部落差別人権委員会合宿
	25日	土	〃
	30日	木	ドミニコ幼稚園
	31日	金	ドミニコ小・中・高
6月	1日	土	八木山教会50周年
	6日	木	社会司教委員会
	19日	水	学校法人理事会
	28日	金	部落差別人権委・全国会議（Sファミリア）
	29日	土	〃
7月	7日	日	第5地区堅信式（東仙台）
	8日	月	司教総会
	9日	火	〃
	10日	水	〃
	11日	木	〃
	12日	金	〃
	17日	水	東京教会管区会議
	18日	木	東京教会管区会議
	24日	水	学校法人理事会
	26日	金	青森県カトリック幼稚園連盟

2019年度司祭人事異動

	氏名（敬称略）		所属	赴任地	前職・前任地
新任	メヒア　タデオ　ラファエル	Mejia Tadeo Rafael	グアダルペ宣教会	第1地区担当	弘前教会研修
離任	ロワゼル　ジャン　シャール	LOISELLE Jean Charles	ケベック外国宣教会	カナダへ帰国	第2地区担当
新任	カストロベルデ　パトリック	CASTROVERDE Parick	淳心会	第3地区担当	サバティカル
離任	ガッラ　ウィルフリドゥス	NGALLA Wilfridus	淳心会	淳心会本部	第3地区地区長
新任	堀江 節郎		イエズス会	第3地区担当	ブラジル宣教
異動	渡辺 彰宏		仙台教区	第3地区担当	サバティカル
異動	川崎 忠紀		仙台教区	第8地区担当	第4地区地区長
異動	ガブリエル　李　錫　イソク	LEE SOUK	光州教区	第5地区担当	元寺・日本語研修
新任	ペトロ　ユ		ドミニコ会	第5地区担当	
新任	ロボ　フェリックス	LOBO Felix	神言修道会	第6地区担当	新潟・能代教会
新任	ロペス　ホセ　アウセンシオ	LOPEZ Jose Auscencio	グアダルペ宣教会	第6地区担当	メキシコ宣教
離任	エテメ　エミール	ETEME Emile	ケベック外国宣教会	教区外	第8地区担当
休暇	會津 隆司		仙台教区	サバティカル：5-7月	第5地区地区長

編集後記

今回からは英語要約版がでるようになりました。このことによって、日本にいらっしゃる外国籍の信者さんが教会に集まり、私たちがそのエネルギーをいただけることを、強く期待しております。　（上野　隆）

仙台教区広報委員会では、原稿の投稿を募集しております。投稿は、随時受け付けますので、下記のメールあてに添付ファイルでお送りいただければ助かります。また、メールをお使いでない場合は教区事務所宛てに、手紙でお送りいただいても結構です。

sendaikyoukuho@gmail.com

皆様がたの積極的な投稿をお待ちしております。

次号発行予定日　8月4日（日）　原稿締め切り　5月末